

## 巻頭言

## 次世代の人工知能研究者との交流



折原 良平

(株式会社東芝研究開発センター)

去る2017年7月より本学会副会長を拝命しております。人工知能技術がこれまでになく注目される中、会員の皆様や社会からの期待に応えられるよう、微力ながら努力する所存です。よろしくお願いいたします。

筆者は、30年近い会社生活の中で、そのほとんどがいわゆる「AI冬の時代」であったにもかかわらず、幸運にも(?)人工知能の研究を続けることができました。その背景には、さまざまな事情がありましたが、特筆すべきは、理解と洞察力に優れた諸先輩方の存在です。こうした方々のご紹介により、2005～10年までは東京工業大学、2010年から現在までは電気通信大学において、客員(連携)教員として、企業の研究所におけるのは別の視点からAI研究に携わる機会をいただきました。専任の大学教員の方々にとっては当たり前の話かもしれませんが、研究者生活も後半に入ってから大学の仕事をさせていただくようになった者として、感じることを述べさせていただきます。

筆者の研究室では、研究テーマ選定は学生の自主性に任せています。もちろん、「○○の研究をしたいが、どんなアプローチでどのような結果を出せば論文になるだろうか」というような相談には乗りますが、題材を選ぶのは学生です。ときには、名前を聞いただけでは何のことやわからないテーマをもって来る学生もいます。U君は「Twitterのマジレス」を研究したいと言ってきました。若い読者には説明不要でしょうが、「マジレス」とはふざけた発言に対してまじめなレスポンスを返すことで、当時の筆者にはすぐには理解できませんでした。話を聞いてみると、SNS疲れを生じさせる要因の一つとして不愉快なレスポンスがあり、U君の中ではその代表選手がマジレスである、ということがわかりました。そこでようやく、「君がやりたいのは、マジレスじゃなくてうざレスなんだね」と建設的な議論ができるようになりました。筆者も残念ながらベテラン化し、職場の若手と交流する機会は限られているので、若い人が素直に興味をもつ事柄に触れられるのは貴重な機会です。また、収益性や社会的インパクトから離れて、個人にとっての課題を採求するのも、企業の研究者にとっては新鮮といえます。

指導した学生の論文が初めて人工知能学会論文誌に採録となったときには、これまでにない感慨を味わいました。自分の論文が初めて採録となったときの気分と違うことには納得できたのですが、会社の部下の論文が通ったときの気持ちとの差は何なのだろう、と軽く狼狽してしまうほどの感動を覚えました。断っておきますが、会社で部下の指導を良い加減にしているわけではなく、日頃の議論や論文へのアドバイスなど、学生に対するのと大きな違いがあるとは思えません。部下の論文が通ればもちろんうれしいのですが、感動したかという点、違う気がします。何が違うのか、正確なところはわかりませんが、学生の場合は、研究者として極めて未成熟な時代を見ているからかもしれない、と思っています。子供は赤ちゃんのときが一番かわいいと聞きます。筆者には子供がいないので実感としてはわかりませんが、かわいいときを知っているからこそ、成長した姿に感動する、という理屈はあり得ると思います。

大学の仕事をさせていただいてつくづく感じるのは「教うるは学ぶの半ばなり」ということです。講義に備えて資料を準備していると、自分がきちんと理解できていなかった概念やアルゴリズムに気付かされます。こうして準備した講義が、思わぬところで役に立つようになりました。AIブームを迎えて、「AIって何だ、機械学習について教えてくれ」と社内のあちこちからリクエストがかかるようになり、解説する機会が増えています。こんなときは、学生向けに行ってきた講義の経験がものをいいます。何といても、学生は厳しい聴衆であり、少しでも講義への興味が失われれば、たちまち夢の世界へと旅立ってしまいます。その試練をくぐり抜けた後では、礼儀正しい聴衆である会社の同僚達を相手にするのは、難しいことではありません。

はじめに述べましたが、筆者は企業の研究者を務めるかたわら教員として学生と接する経験をもつことができ幸運でした。ところで、教員にならなくても学生と交流できる機会があります。それは、本学会全国大会の参加者交流会です。名古屋で行われた昨年の大会には600人を超える学生の参加がありました。筆者も参加者交流会に参加し、何人かの初対面の学生と話をしました。こちらの鼻目目かもしれませんが、彼らもそれなりにベテランとの対話を楽しんでいるようです。今年の全国大会は6月5～8日に鹿児島市城崎観光ホテルにて行われます。企業研究者の皆様、ぜひ全国大会にご参加いただき、参加者交流会にて次世代のAIの担い手との対話を楽しんではいかがでしょうか。